

# 風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2017 春号 **78**

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集  
山口古墳群、  
根来寺遺跡の出土遺物整理

根来寺遺跡 発掘調査

# 特集 山口古墳群、根来寺遺跡の出土遺物整理

## はじめに

京奈和自動車道は、京都・奈良・和歌山を結ぶ延長約120kmの高規格の自動車専用道路です。

和歌山県にとっては、一般国道24号のバイパス道路として交通渋滞の緩和、交通事故の減少などに寄与することが期待される道路ですが、紀北西道路のうち最後まで残っていた岩出根来インターチェンジから和歌山ジャンクションまでの延長6.5kmが、さる3月18日に完成し、阪和自動車道と結びつきました。

今回紹介する山口古墳群と根来寺遺跡の出土遺物整理は、この京奈和自動車道の紀北西道路建設に伴って発掘調査を行った時のものです。

このうち山口古墳群は平成25年度に、根来寺遺跡は平成23年度から25年度にかけて3次の調査が実施されました。その後、平成27年度と28年度の両年に整理業務を行い、このたび調査報告書を刊行するに至りました。

以下、調査も含めて今回の整理で判明した成果などを紹介させていただきます。

## 山口古墳群

山口古墳群は、和歌山県と大阪府との境をなす和泉山脈の南裾部分、標高175mほどの丘陵頂部に位置しています。行政区画で言えば、和歌山市の北東部、岩出市との境近くにあたります。

山口古墳群は、これまで前方後円墳1基と円墳10基からなる古墳群とされてきました。調査地点は、そのうちの10号墳の場所に相当すると考えられていたのですが、調査の結果、古墳ではなく単なる自然地形の高まりであったことが判明しました。その代わりと言ってはなんです、それ以外の興味深い遺構が見つかりました。『礫石経塚』という信仰に係る遺構です。

礫石経というの是一字一石経とも称されるもので、小さな石ひとつひとつにお経の文字一字を筆で書き写し、埋納したものと



写真1 礫石経埋納状況

です。全国的に見られるもので、和歌山県においては紀南地域を中心に20を超える類例が見つかっています。ただ、今回のようにほぼ完全な形で、それも発掘調査で見つかったことははじめてのことです(写真1・2)。

こうした礫石経



写真2 同断面状況

が埋納される場所は、平安時代から鎌倉時代に盛行をみた経塚が、主に社寺境内の中もしくはその近辺に埋納されるのに対して、社寺以外にも交通の要衝である街道筋や辻、岬のほか今回のように田畑・村落などを一望できる丘陵などさまざまです。

今回の整理作業のなかで確認されたこととしては、これらの石の大きさは小さいものでは1cm、大きいものでは5cmを越えるものもありましたが、平均すれば3cm前後でした。総数は4421個で、このうち写真3のように明らかに書かれた文字が判読できるものが336個、字が書かれてはいるもののその字の判別がで



写真3 石に書かれた文字



写真4 字体の異なる漢字

かったものが1066個、消えてしまったか、最初から書かれていなかったものが2989個を数えました。また字体を検討した結果、写真4で示した菩薩の「薩」の字でもおわかりいただけるかと思いますが、明らかに字体の違うものが認められることから一人ではなく複数の人によって書写されていることがわかりました。

さらにものお経を書写したかを探るために、可能性の高い法華経の経典いくつかについて合致率を試みましたが、そのうちもつとも合致率が高かったのが、「無量義経」の序文ともいえる「徳行品第一」で経文字1017に対して合致した漢字は

251、合致率24・68%という数値を得ました。しかし、経典を特定するには至りませんでした。

埋納時期についても、共伴して出土した土器はまったくなく、不明と言わざるを得ません。ただ、各地の類例などを見ると、礫石経の埋納は室町時代中ごろには始まったようですが、近世に入ってその数を増し、盛時は江戸時代後期のことです。近代に入ると姿を消してしまうようです。また同じ紀の川流域のかつらぎ町に所在する加陀寺前経塚には文政五年(1822)の銘をもつ「法華塚」と記された石碑が現存しており、これらを考慮すれば江戸時代の終わり頃の可能性が高いものと考えています。

造営主体やその目的についても残念ながらよくわかりません。当地付近は修験道のルートに当たっていることからその関連も考えられますし、近世にはいるとこうした仏教的作善業の勧進として六十六部、いわゆる廻国聖が深く介在した例が知られておりその可能性も考えられます。

想像を許されるなら、眼下の村の人々が介在者を得て、村の安寧や家族の息災を祈願して埋納したのかもしれない。

いずれにしても当時の人々の祈りの形態を知る上で貴重な資料といえるでしょう。

## 根来寺遺跡

新義真言宗の総本山として知られる根来寺は、紀の川北岸の岩出市に所在します。平安時代の終わり頃、興教大師・覚鑿かくばんにより開かれ中世を通して盛況を誇った寺院ですが、天正13年（1585）羽柴秀吉の焼き討ちにより壊滅的な打撃を受けました。その遺跡が「根来寺遺跡」で、わが国を代表する中世の寺院遺跡であり、国の史跡にも指定されています。

根来寺遺跡では京奈和道に関連して3カ



写真5 桃坂谷の風景（手前が調査区）

所の調査が実施されましたが、そのうちのひとつ桃坂谷（蓮華谷）と称されている山内の中心部から北側の山懐へと延びている谷の奥まった地区での調査で多くの遺構や遺物が確認されました。

写真5のようにこの谷を縦断して農道がつけられています。いまから30年ほど前、この農道を作るにあたって発掘調査が実施されました。今回の調査地はその農道を挟んだ両側ということになります。

農道の調査の折、幅2mほどの古い道を確認しましたが、その道が途中から消えてしまいました。

写真6で示したように少しわかりづらいかもしれませんが、古道は現有の農道から逸れてさらにまっすぐ延びていることが確認できました。また、その両側には間口25m前後の坊院の敷地がいくつか並んでいることも確認されました。

敷地の中を詳細にみると、貯蔵施設である半地下式の倉庫や井戸、排水施設である溝などの遺構が見つかっています。なかでも写真7の石組みの溝は幅0.8m、深さ0.6mを測るりっぱなもので、この周辺の基幹排水路であったと考えられるものです。その中には享禄・天文・永禄・天正といっ



写真6 調査区全景（上空から）

た16世紀前半から後半にかけての年号銘のはいった板碑・一石五輪塔・宝篋印塔などの石造遺物が投げ込まれた状態で見つかっています。おそらく天正の兵火後に遺棄されたものでしょう。

遺物整理の段階で、この地区から出土した数千点に及ぶすべての遺物に目を通しました。そ



写真7 石組溝と石造遺物

の結果、時代的にみると16世紀代のものが圧倒的に多く、95%ほどを占め、次いで15世紀中頃から後半の時期に帰属するものが多く、この両者で限りなく100%に近い数値を得ました。ごく少量確認されたのは、瓦器碗や東播系の須恵質のこね鉢など13世紀代に帰属するもの、逆に復興後の根来寺の時期に相当する伊万里焼の碗といった18世紀にはいつてからの新しい遺物群でした。

このようなことから、根来寺創建の地とされる円明寺や現在国宝の大塔が建つ伽藍域に近い部分では13世紀に入ると坊院が建てられはじめ、15世紀になると密集するほどに展開していますが、この谷の奥では15世紀に入っても坊院の数は少なく、16世紀になって一気に増えはじめ、天正の兵火直

前には古道に沿って櫛比<sup>しび</sup>するように坊舎が建ち並んでいた様が窺えます。

また、復興期には山内の中心部がいち早く復興するのに対して、この付近まで復興の手は及んでいなかったことが明らかになりました。おそらく荒蕪地となっていたかいち早く水田と化していた地域だったと推測されます。

また、16世紀代の遺物を詳細に分析した結果、日常使う調理具の搗鉢や貯蔵用の壺・甕類では圧倒的に備前焼が多いことが判明しました。美濃や瀬戸の製品は一定量入ってきていますが、その器種は天目茶碗や皿類に限られるようです。常滑焼や丹波焼なども見かけますが、その量は極めて少ない状況でした。

そのほか当時貴重であったと思われる中国製の青磁碗や白磁・染付の碗・皿もかなりの数を数えています。今更ながら中世根来寺の消費力、それを支える経済基盤に驚かされました。

今回の京奈和自動車道建設に伴う調査並びに整理は、中世根来寺の興亡を考える上で、またひとつおおきな資料をもたらしたものであったと考えています。

蛇足ながら最後に少し個人的感慨をお許しただきたいのですが、



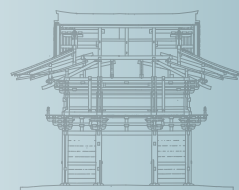
写真8 出土した鬼瓦や土器類

30年前の農道の調査を担当したのも筆者でした。

年たけて、再びこの箇所を調査し、あの古道の延長を確認するなどとは思いませんでした。いささかの感慨を禁じ得ないものがあります。

あの西行法師なら思わず「いのちなりけり」と歎じたところでしょう――。

(村田 弘)



### 継桜王子跡社殿の保存修理

本誌71号で紹介した、田辺市中辺路町野中の継桜王子跡社殿（Oshikawa）の修理工事がこのたび完了しました。

国庫補助事業として平成二十六年に木工事と基礎工事、塗装・彩色の調査を実施し、今年度は調査結果に基づく塗装・彩色工事を行いました。

県指定天然記念物「野中の一方杉」の傍にあるため、あまり目立つ建物ではありませんでしたが、調査結果に基づく塗装・彩色

色修理を終えて鮮やかな外観を取り戻しました。

修理を通しては、節の無い良質な木材だけで作られていること、壁板の彩色が王子の名称になぞらえてか、「松・竹・梅」ならぬ「桜・竹・梅」であったことなど、この建物の建立に携わった当時の人々の思いを垣間見られた気がしています。

これからも熊野古道を参詣される方々を迎える建物であり続けてほしい、と祈りながら・・・。

（下津健太郎）



夕日を受ける社殿と熊野古道（右）

修理を終えた継桜王子跡社殿の彩色  
（壁板の彩色は「桜」「竹」「梅」の構成）

## 文化財建造物修理技術者の道具⑦ ヘラで土壁を調べる

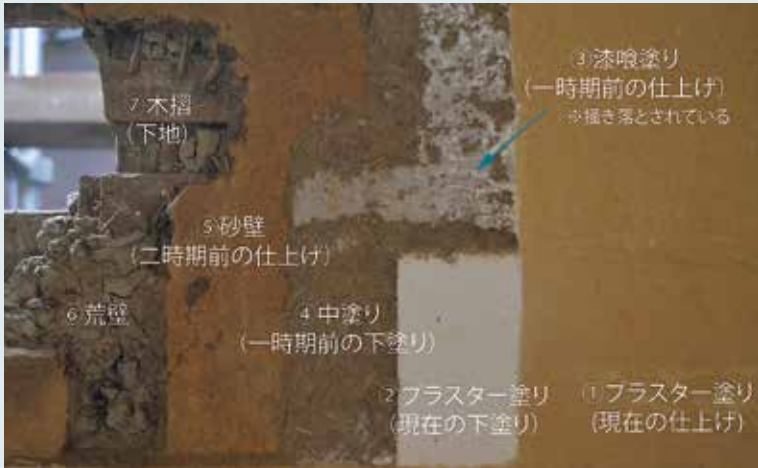
土壁の修理を行う際、着手する前に仕様を確かめる必要がある為、ヘラ（スクレーパー）を使用して壁の表面を掻き取って、壁土がどのように重なっているのかを調べます。各面がすべて同じ構成なのか、他の部屋との違いはあるのか等、これまで調査してきた他の資料と照らし合わせて、建物の歴史を明らかにしていきます。土や漆喰の表面の粗さや色味を注意深く観察しながら各層を順に現しますが、微妙な違いを見つけて区分するのが難しく、慎重に作業を進めなければいけません。

今回、私も旧西村家住宅の一室で壁土の分類を試みてみました。

現在の仕上げの下に隠れている層をヘラで現しながら、何度修理されたのか考えてみましたが、痕跡を見逃してしまい、プラスター（注）塗りの下地と漆喰塗りが掻き落とされた痕跡の違いに、気が付くことが出来ませんでした。材料的に捉えて正しく分類する難しさを実感し、建物の歴史を捨て去ってしまう怖さも感じました。

（大給友樹）

注：石膏を水で練り合わせた塗り壁材料



様々な時期の層が重なりあっている  
（旧西村家住宅：事務室）

## きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

### 寛永通寶と六道銭

埋蔵文化財課

今号より、埋蔵文化財課からは、その時々発掘調査で出土した遺物などの小話をお届けしたいと思います。

今回は、私が昨年に発掘調査を行った日高郡美浜町吉原遺跡の発掘調査で出土した銭貨についてお話ししたいと思います。吉原遺跡では、火葬墓から「寛永通寶」という江戸時代の銭貨が出土しました。寛永通寶は、収集界では「古寛永」（古寛永銭）と「新寛永」（新寛永銭）に大きく分けられます。両者の簡単な見分け方を紹介したいと思います。ポイントには、「寛」と「寶」の字です。古寛永では、「寛」の12画と13画の頭が相接し、「寶」の貝画末尾が「ス」状である一方、新寛永は、「寛」の12画と13画の頭が離れ、「寶」の貝画末尾が「ハ」状となっています。その他、裏面に「文」「佐」「仙」「十」「小」「千」「一」「川」「元」「足」「長」「久」「ト」「盛」「ノ」、波模様があれば新寛永です。

それぞれの製造開始時期は、文献からおおよそわかっており、古寛永は寛永3年（1626年）から寛文8年（1668年）、一方、新寛永は、寛文8年（1668年）から幕末頃までです。

さて、吉原遺跡では、前者である「古寛永」が火葬墓から出土しました。どうやら遺骸を火葬した際、もしくは埋葬した際に入れられたようですが、その背景には「六道銭」思想が存在したと推定されます。六道銭は、俗説によれば死者が冥界に行く際に渡らなければならない三途の川の渡し賃といわれ、仮に持っているといないと死者は冥界に入れないまま、あてもなくさまようことになってしまうそうです。こうした考え方は、14世紀に始まったように、仏教、とりわけ浄土思想の普及とともに庶民にも広がったといわれています。

寛永通寶は、街の骨董品屋さんや骨董市等でよく見ることができるとい時代時代の銭貨です。現物を見かけた際は、ぜひ表の文字や裏面の文字・模様などにも注目してみてください。（金澤 舞）



寛永通寶模式図



文字模式図

【参考文献】

鈴木公雄 2002

『銭の考古学』吉川弘文館

永井久美男 1996

『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会

# 催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2017年春～夏)

## 和歌山県立紀伊風土記の丘

- 春期企画展「古代のアクセサリー」 2017年 3月14日 (火)～ 5月14日 (日)
- 展示講座①「春期企画展」 2017年 4月15日 (土) 13:30～
- 「フカミンのおしゃべり考古学①」 2017年 5月19日 (金) 13:30～
- 「古墳ガイドツアー①」 2017年 5月20日 (土) 13:30～
- 和歌山県埋蔵文化財発掘調査成果展「紀州のあゆみ」 2017年 6月 3日 (土)～ 7月 2日 (日)
- 展示講座②「紀州のあゆみ」展示解説 2017年 6月10日 (土)

## 和歌山県立博物館

- 企画展「躍動する紀南武士 一安宅氏と小山氏一」 2017年 3月11日 (土)～ 4月16日 (日)
- ロビー展「さわって学ぶ 仏像の基礎知識」 2017年 3月28日 (火)～ 6月 4日 (日)
- 特別展「東照宮の文化財Ⅱ 一没後400年家康の遺宝一」 2017年 4月22日 (土)～ 6月 4日 (日)
- 企画展「紀伊徳川家の家臣たちⅡ」 2017年 6月10日 (土)～ 7月17日 (月)

## 和歌山市立博物館

- コーナー展示「南方熊楠と和歌山『紀伊国名所図会』の出版本屋・帯屋」 2017年 3月28日 (火)～ 6月 4日 (日)
- 企画展「紀州の風景 一和歌の浦を中心に一」 2017年 4月22日 (土)～ 6月 4日 (日)

## 高野山霊宝館

- 冬期平常展「密教の美術」 2017年 1月21日 (土)～ 4月 9日 (日)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

### 目次

- 1 表紙「根来寺遺跡 発掘調査」
- 2 特集「山口古墳群、根来寺遺跡の出土遺物整理」
- 6 文化財建造物課 短信「継桜王子跡社殿の保存修理」
- 7 きのくに歴史小話「文化財建造物修理技術者の道具⑦」ヘラで土壁を調べる  
「寛永通寶と六道銭」
- 8 催し物案内

## 風車78 (2017・春号)

平成 29年 3月 31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】

〒640-8301 和歌山市岩橋1263-1

TEL 073-472-3710

FAX 073-474-2270

maizou-1@wabunse.or.jp